

俺の奴隸が勇者な件について

鈴木閣下

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

こんな感じで誰か書いてくれないかな…。

頼むよ、ホントに頼む。

俺の奴隸が勇者な件について

目

次

1

俺の奴隸が勇者な件について

ラフタリアは謎の存在だ。

今も隣でニコニコと笑う彼女は、見た目だけなら可愛らしい獣人の少女である。盾しか装備出来ず、ろくに攻撃の出来ない俺にも優しく出来た少女だ。ことある毎に俺のことを【主】と呼ぶことは困つたところだが、些細な事である…彼女の非常識な行動の数々に比べれば。

召喚されたあの日、王に用意された部屋で寛いでいると、扉を突き破つて彼女はダイナミックに現れた。突然の事態に呆然としている俺に向かつて、天使のように微笑むと「さあ、冒険を始めましょう！」と言ひ放つた。

悪い意味でドキドキが始まつたし、冷静になつた後部屋の大穴を見て、ハートが熱くなりやる気になつたもんだ。

彼女曰く、「貴方の正義の心が私を呼んだ」らしい…謎だ。

更に言えばその圧倒的な戦闘力も謎だ。

背丈の何倍もある巨大な魔物を、どこからともなく取り出した謎の剣やら弓やらで潰していく様は、明らかに普通ではない。

ほら、今も…

「グレエエエトアアアチエリイイイ！」

ラフタリアが叫びながら腕を天に伸ばすと、巨大な黄金の弓が現れた。さらに何故か快晴だったはずの空に暗雲がかかり雷鳴が轟く。そのまま彼女は弓を持ち決めポーズを取ると、弓から光の弦が伸びる。黄金の弓と相まってとても神秘的な光景だ。そして黄金の矢をつがえれば、既に終わりは近い。

「ゴールデンアローー・ファインアルシユウウット!!」

眩い光と共に矢が放たれた。

矢が通るだけで魔物が次々に消えていく。

最後に一際巨大な魔物に刺さり爆発！それを背にラフタリアが決め！…ここまでがいつもの流れだ。

ちなみにこの間、謎のBGMが頭の中に流れてたりする…謎だ。他にも剣でぶつた切つたり、黄金の翼が生えたりする。一番謎だつ

たのは「今こそ我らの力を合わせるとき！」とか叫んだと思えば、ラフタリアそつくりの少女たちが集結し、黒髪のラフタリアを担いだかと思うと、黒髪ラフタリアの口から巨大なビームを発射するというウルトラCを成し遂げた。

その光景は、時たま夢に出てくる程度にはおれにトラウマを残したが…些細な事だと思う。

ビーム放つたあとも、時々銀髪や青髪のラフタリアが闘いに加わっていることがあるが、触れたことは一度もない…なんか、怖いから。ちなみに登場するとき、「ゴッドラフタリア！」とか、「キャプテンラフタリア！」とか叫んでるが決して気になつたりしない…決して。

しかしながら、謎なのはラフタリアだけじゃない。

「ハンマアアアアコネクトッ!!」

…この鳥の話はまた今度にしようと思う。